

Title	アガンベンにおけるバンヴェニスト (1) : セミオティック / セマンティック
Sub Title	Benveniste chez Agamben (1) : sémiotique / sémantique
Author	高桑, 和巳(Takakuwa, Kazumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.35 (2020.) ,p.195- 220
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0195

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アガンベンにおけるバンヴェニスト（1）

——セミオティック／セマンティック——

高 桑 和 巳

0. はじめに

本稿では、ジョルジョ・アガンベンの仕事全体（最初期から現在に至るまで）において言語学者エミール・バンヴェニストの業績がどのように参照されているかを確認する⁽¹⁾。

アガンベンが意味をほとんど担わずにバンヴェニストの名を挙げているだけというようなばあいはおおむね取りあげないが⁽²⁾、以下では原則と

(1) なお、すでになされた類似の試みに以下がある。Jacopo D'Alonzo, “Agamben lettore di Benveniste, tra linguistica e filosofia,” *Horizonte* (Neue Serie), 3 (online journal, 2018), pp. 137-156. また、以下も近傍に位置づけられる。D'Alonzo, “Quel che resta di Saussure: La critica alla linguistica nei primi scritti di Giorgio Agamben,” *Studi filosofici*, 38 (Napoli: Bibliopolis, 2015), pp. 241-264 ; “Filosofia del linguaggio e critica alla linguistica nei primi scritti di Giorgio Agamben,” *Rivista italiana di filosofia del linguaggio*, 9, no. 1 (online journal, 2015), pp. 46-58. 示唆に富むこれらの論文に対して、以下はあくまでも無味乾燥に網羅を目指すこと、また原則としてテーマごとに時間順に従うことを特徴としている。

(2) たとえば以下。Giorgio Agamben, *Il tempo che resta* (Torino: Bollati Boringhieri, 1998), p. 65 ; *Il Regno e la Gloria: Per una genealogia teologica dell'economia e del governo (Homo sacer, 2-4)* (Vicenza: Neri Pozza, 2007 [Torino: Bollati Boringhieri, 2009]), p. 84 ; “Critique de l'action” (2016), in Anoush Ganjipour, ed., *Politique de l'exil: Giorgio Agamben et l'usage de la métaphysique* (Paris: Lignes, 2019), p. 253 ; *Karman: Breve trattato sull'azione, la colpa e il gesto* (Torino: Bollati Boringhieri, 2017), pp. 47, 52.

して、バンヴェニストへの明示的参照をともなって展開されている議論のすべてを、アガンベンの仕事の最初期から現在に至るまで総ざらいしていく。名の登場しない暗示的な参照についても、重要と思われるものには、気づいたかぎりにおいて触れる。

情報源には、単行本だけでなく、雑誌や論文集に収録された論文、さらには雑誌や新聞でのインタビューなども含める。要するに、アガンベンが自論を開陳していると思わせるテキストはすべて調査の対象とする。

この作業は、本稿では完結しない（本稿は、上記の作業全体に必要なはずの分量の3分の1程度に相当する）。あくまでも紙幅の都合で、今回は、一般言語学関連からはフロイト批判とセミオティック／セマンティック論だけを扱い、アガンベンの参照している代名詞、^{エノンシオン}言表行為⁽³⁾、中動態、名詞文、コプラ、人間言語、「リュトモス」(rhythmos)、「給養する」(trephein)といったトピックについては別の機会に扱う。また、語彙論関連も、わずかな例外を除いてほとんどすべての辞項 (sacer, sacramentum, horkos, kolossos, pistis, fides, *kred, charis, domus, aedes, potis, etc.) の検討を別稿に委ねる。

1. バンヴェニストとの出会い

アガンベンの仕事にバンヴェニストの名が登場するのは「アビ・ヴァールブルクと名のない学」(1975年)が最初である。ヴァールブルクは、自らの創始した「名のない学」(アガンベンは、これが後にエルヴィン・パノフスキーらによって「^{イコノロジー}図像学」へと変形されてしまったとしている)に

(3) 一般言語学用語 (langage, langue, parole, discours, signifiant, signifié, signifiante, référent, sémiotique, sémantique, sémiotisme, sémantisme, énonciation, etc.) に本稿で充てている訳語はあくまでも暫定的なものである。これらの単語が一般言語学のニュアンスを帯びて用いられている(ないし、その可能性がある)ばあいは、その旨が無理なく判明するように配慮するつもりである。なお、本稿で参照するテキスト(アガンベン、バンヴェニスト、その他)に既訳が存在するばあいは、本文についてもタイトルについても既訳を参照していない。

よって、その他の人文知（「西洋文化の人間論⁽⁴⁾」）の最良の貢献とともに並ぶことになるというたぐいの讃辞のなかに、この言語学者の名が現れる。「[ヴァールブルクの] 貢献によって彼の名はモース、サピア、スピッツァー、ケレーニイ、ウーゼナー、デュメジル、バンヴェニストその他、それほど多くない人々の名の脇に書きこまれうるものとなる⁽⁵⁾」。他の著名な研究者と並べての言及ではあり、これだけではさほど重要とも思われたい。とはいえ、アガンベンがこのときにバンヴェニストの主要業績に触れていたらしいということは確認される。

1975年というのは、バンヴェニスト（1902-76年）にとってはいちおう生前にあたるが、1969年以降の彼は失語症に罹っており、知的キャリアは残念ながら途絶している。したがって、当時33歳のアガンベン（1942年-）がバンヴェニストと実際に話を交わす可能性はなかった。アガンベンにとってバンヴェニストは同時代人というよりは、同時代において出会いそこねた年長者である。

歴史家パトリック・ブーシュロンとの対談「考古学者と歴史家」（2017年）で、アガンベンは「1960年代末に最初に会って以来、バンヴェニストの著作は私にずっと付き添い、私から離れたことは一度もありません⁽⁶⁾」と言っている。同年に、これに少し遅れて発表された自伝の試み『仕事部屋の自画像』（2017年）には、「70年代初頭にはじめて読んで以来、著作が私にずっと付き添い、私から離れたことの一度もない言語学者、エミール・バンヴェニスト⁽⁷⁾」云々とある。記憶のわずかなゆらぎがあるとはいえ、アガンベンがバンヴェニストの著作と出会ったのはおおよそ1970

(4) Agamben, “Aby Warburg e la scienza senza nome” (1975), in *La potenza del pensiero: Saggi e conferenze* (Vicenza: Neri Pozza, 2005), p. 142.

(5) Agamben, “Aby Warburg e la scienza senza nome,” p. 143.

(6) Agamben & Patrick Boucheron, “L’archéologue et l’historien: Dialogue avec Giorgio Agamben,” *Critique*, no. 836/837 (Paris: Minuit, January/February 2017), p. 170.

(7) Agamben, *Autoritratto nello studio* (Milano: Nottetempo, 2017), p. 152.

年前後だということがわかる。

正確な出会いの時点をこれ以上正確に特定することはできないにせよ、アガンベンの最初の単行本『内容のない人間』（1970年）にバンヴェニストの痕跡が確認されないことには変わりはない⁽⁸⁾。アガンベンの全仕事を便宜上、初期（最初期から『スタンツェ』（1977年）ごろまで。美学への関心が軸となる）、中期（『インファンティアと歴史』（1978年）以降、『散文のアイデア』（1985年）の少し後まで。言語への関心が前景化する）、後期（『到来する共同体』（1990年）前後から現在まで。政治への関心が付け加わる。すでに30年ほどに及ぶこの長い「後期」にはさらに下位区分を設けてもよい）と分割できるとすれば、初期の終わりにさしかかったあたりでようやく、いわば「中期」における言語思想への関心の先触れとしてバンヴェニストが名指される、とも言える。

1970年前後に読みはじめたということは、最初の出会いは『一般言語学の諸問題』第1巻（1966年）か、『インド-ヨーロッパ諸制度語彙集』全2巻（1969年）のいずれかだろう（『諸問題』第2巻（1974年）はまだ刊行されていない）。最初に実質的に読まれたのは『諸問題』第1巻（および、『諸問題』第2巻に収録されることになるいくつかの論文）だと推察するのが妥当だろう。理由は以下のように説明できる。

「アビ・ヴァールブルクと名のない学」には、8年後に「1983年の傍註」（1983年）という短いテキストが追加される。そこでは、8年前にバンヴェニストに言及したのがどのような文脈においてのことだったかに関して説明が補われている。「これ [[ヴァールブルクと名のない学]] は、一つの人文科学を代表すべき模範的な人物たちを描く一連の肖像の第一のものとして構想された。ヴァールブルク論以外で着手されたのは、バンヴェニ

(8) シニフィアン／シニフィエ（ソシュールに直接由来するとおぼしい）への言及は見られる。以下を参照。Agamben, *L'uomo senza contenuto* (Milano: Rizzoli, 1970 [Macerata: Quodlibet, 1994]), p. 21. また、ソシュールへの最初の明示的言及はさらに2年遡る。以下を参照。Agamben, “L'albero del linguaggio,” *I problemi di Ulisse*, no. 63 (Firenze: Sansoni, 1968), pp. 105, 111.

ストと言語学に捧げられた論文だけであり、その論文も完成しなかった⁽⁹⁾。つまり、モース、サピア、スピッツァーらと並べられたバンヴェニストは、とはいえ事実上、いわば他から頭一つぶん抜き出していた。なるほど、8年後（「傍註」の執筆時点では「7年後⁽¹⁰⁾」となっている）からの回想だからわずかな記憶違いはあるかもしれない。だが、モース論、サピア論などは書きはじめられてさえおらず、それに対してバンヴェニスト論は書きはじめられたが仕上がらなかった、という基本的な事実自体は疑うにおよばない。

さて、その「傍註」では、バンヴェニストの貢献として、一般言語学関連のもの（とくに言表行為論）と、インド-ヨーロッパ諸制度の語彙に関するものの両方が挙げられている。「『インド-ヨーロッパ諸制度語彙集』によって比較文法が頂点に達し、その尾根で歴史諸学の認識論的カテゴリーがぐらついているように思われた一方、言語学は言表行為論によって哲学の伝統的地盤を攻囲していた。いずれのばあいも、このことは学（言語学、人文諸科学の「先端的学問領域」）が限界に行き当たったということと一致していた⁽¹¹⁾」。実際にはこの二つの急進化はいずれも功を奏さなかった（前者では人文科学はこの急進化の影響を受けない記号論へと退却し、後者では代わりに生成文法が興隆を見せた）旨を確認した後、アガンベンはバンヴェニストの急進性をあらためて強調している。

じつのところ、音声学が（そしてその足跡をたどってレヴィ-ストロースの人類学が）無意識の構造の研究へと向かい、そこから明らかな利益を抜き出していた一方で、バンヴェニストの言表行為論は主体という陣営を攻囲し、^{ラング}言語から^{パロール}言葉への移行の問題を攻囲することで、意識／無意識という対立ではきちんと定義することができない領野を

(9) Agamben, "Postilla 1983" (1983), in *La potenza del pensiero*, p. 144.

(10) Agamben, "Postilla 1983," p. 144.

(11) Agamben, "Postilla 1983," p. 144.

言語学の探求に対して開いていた。それと同時に、『インド-ヨーロッパ諸制度語彙集』において頂点に達する、比較にもとづく探求は、通時／共時や歴史／構造といった対立では適切に評価できない諸々の成果を提供していた⁽¹²⁾。

なるほど、言表行為論と語彙研究の両方に対して全面的な賛意が示されている。

ただし、そうは言っても、語彙研究の具体的貢献がアガンベン著作において頻繁に参照・援用されるようになるのは、実際にはかなり後になってからである。「傍註」の発表された1983年の時点でも、『語彙集』における個々の議論の明示的参照は前景化していない。しかしかの語彙に関するバンヴェニストによる議論は、ごくわずかな例外を除けば、『ホモ・サケル』（1995年）まで具体的に参照されることがない。その意味では、「傍註」における言明は、バンヴェニストによる貢献のもつ二つの面の一般的確認にとどまっていると言ってもよいだろう。

なお、アガンベンは、一般言語学におけるバンヴェニストの諸貢献のなかでは、（指示詞・人称代名詞と関わる）言表行為論の評価よりも、セミオティック／セマンティック論の評価のほうをごくわずかに先行させた（仮に、両者を互いにこのように截然と切り離せるとしての話ではあるが）。

2. 初期の例外的な語彙論参照、およびフロイト批判論文参照

初期の語彙論参照は、多く数えて二つだけである。

一つめは、「アビ・ヴァールブルクと名のない学」の2年後、それとほぼ同じ問題設定において編まれたと言える単行本『スタンツェ』に見られる。アガンベンは、ギリシア語における「調和」(harmonia)の含意を「この単語のインド-ヨーロッパ語根のまわりにはいくつかの辞項からな

(12) Agamben, "Postilla 1983," p. 145.

る星座が置かれるが、その星座はインド-ヨーロッパ諸民族の宇宙の枢要な一観念に向けて合図をしている。すなわち、星辰の運動から季節の継起や、人間と神々の関係に至るまでの宇宙のリズムを規則づけている正しい秩序の宇宙である⁽¹³⁾と説明し、註で『語彙集』を援用している。「語根 ar- から派生する辞項からなるこの星座には、なかでも、ヴェーダ語 rta, イラン語 arta, ラテン語 ars, ritus, artus, ギリシア語 arariskō が含まれる⁽¹⁴⁾」。

二つめの語彙論参照は、『スタンツェ』の1年後に刊行された『インファンティアと歴史』に収められた「おもちゃの国 歴史と遊びに関するいくつかの省察」という論考に見られる。儀礼と遊びについて、両者が秩序の壊乱という共通点をもちながら、時間に対しては一方は構造化へ、他方は破壊へと向かうと指摘しつつ、アガンベンは、遊びは儀礼からの派生物だとする仮説を支持し、バンヴェニストの論文「構造としての遊び」(1947年)を参照する⁽¹⁵⁾。

大言語学者バンヴェニストの書誌のなかで特異にも脇に除けられたままになっているとある研究において、彼は人類学者たちの結論の数々から出発して、遊びと儀礼のあいだにあるこの関係を深化させているが、両者を一つに結びつけているものだけでなく、両者を互いに対立させているものをも探っている。というのも、遊びが聖なるものの圏

(13) Agamben, *Stanze: La parola e il fantasma nella cultura occidentale* (Torino: Einaudi, 1977 [1993]), p. 188.

(14) Agamben, *Stanze*, p. 188, n. 1. これはアガンベンによる要約的提示 (バンヴェニストからの直接の引用ではない)。実際には以下が参照されている。Émile Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 2 (Paris: Minuit, 1969), p. 100. (アガンベンは p. 101 と誤記している。)

(15) アガンベンはバンヴェニストの論文の題を「遊びと聖なるもの」(Le jeu et le sacré)と註に記しているが、これは誤記。正しくは以下 (引用はこの p. 165 からおこなわれている)。Benveniste, “Le jeu comme structure,” *Deucalion*, no. 2 (Paris: Revue Fontaine, 1947), pp. 161-167.

域に由来するというのが真であるとしても、遊びが聖なるものの圏域を急進的に変容させ、それどころかひっくり返しているというのもまた真だからである。遊びは「転倒した聖なるもの」だと無理なく定義できるほどである。バンヴェニストは次のように書いている。「この聖なる「行為」の力能は、物語を言表する神話と物語を再生産する儀礼とを接合するということにまさに存している。この図式と遊びの図式を比較すれば、違いは本質的なものと見える。すなわち、遊びにおいては「儀礼」だけが生き延びている。保存されるのは聖なるドラマの形式だけであって、そこにあってはあらゆるものがそのつど新たに措定される。だが、「神話」のほうは忘却ないし廃棄されている。諸行為に意味や力を授ける、含蓄ある言葉での語らひは忘却ないし廃棄されている」。jocus, つまり言葉遊びについても同様の考察が成り立つ。「[……] ludus [遊び] とは反対に、それと対称をなすようにして、jocus [言葉遊び] は純粋な「神話」に存している。これには、その神話に現実への取っかかりを与えるいかなる「儀礼」も対応していない」。これらの考察によってバンヴェニストには、遊びは構造だとする定義の諸要素が提供される。「それ [遊び] は聖なるものに起源を有するが、聖なるものの転倒され粉碎されたイメージを提供している。聖なるものが、神話と儀礼とともに実質とする統一性によって定義づけられうるとするならば、私たちは次のように言うことができることになる。すなわち、かたや神話だけを言葉へと、かたや儀礼だけを行為へと翻訳して、聖なる作用の半分だけが完了されているとき、そこには遊びがある⁽¹⁶⁾」。

「遊び／言葉遊び」(ludus/jocus) を、本来は儀礼と神話の不可分なセットであるべきもの(聖なるもの)のそれぞれ半分(儀礼と神話のいずれ

(16) Agamben, *Infanzia e storia: Distruzione dell'esperienza e origine della storia* (Torino: Einaudi, 1978 [2001]), p. 72.

か）だけが完了されるものとして定義づけるというバンヴェニストの説が、賛意を示しつつ参照されている。

なお、このバンヴェニストの遊び論をアガンベンがふたたび参照することはない（「聖なるもの」については『語彙集』第2巻を参照する機会が数度訪れるが、その議論はこの遊び論とは関わらない）。

二つめの例外として挙げたこの遊び論を語彙研究に含めてよいかにも議論の余地はあるが（この論文の内容はたとえば『語彙集』には組みこまれていないし、そもそもアガンベンも、バンヴェニストのこの論文を「特異にも脇に除けられたままになっている」と評している）、いずれにせよ、バンヴェニストによる一般言語学以外の貢献がアガンベンによって参照されるのは、1990年代なかばに至るまで、この2度だけである。ここから、少なくとも1990年代なかばに至るまで、アガンベンにおいて、バンヴェニストの著作への参照としては、一般言語学関連の貢献に対するものが圧倒的に前面に出ていることが確認できる。

さて、『スタンツェ』には、「調和」（harmonia）に関する語源談義をめぐる上述の一節以外にもバンヴェニストの名が何回か現れる。ここでは、小規模な参照のほうを先に片づけておく。それは、『諸問題』第1巻に収録されているフロイト批判論文の参照である。

その参照は、「固有なもの」と「非固有なもの」と題された章でなされている。「非固有」なものとは、ここでは譬喩的・アレゴリー的なものを指す（「非固有」なものが称揚される時代——たとえばバロック期——には、非類似が嵩ずればそれだけ何かが逆説的によく表現されるとされる）。そこで、フロイトが分析を通じてイメージの「非固有」性を明らかにするのは、いわばそのような「非固有」性を称揚したバロック期の回帰のようなものだったたぐいの議論がなされ、そもそも無意識のおこなう操作自体がそのような「非固有」性の技術たる修辞学に逐一对応していると言明される。「したがって、すでに指摘されているとおり、フロイトによって明らかにされた象徴化の本質的手順が旧修辞学の譬喩の目録に逐一对応してい

るとしても、それは単なる偶然の一致ではない⁽¹⁷⁾。そして、「すでに指摘されているとおり」という箇所⁽¹⁸⁾に註が付され、バンヴェニストの「フロイトの発見における言語機能に関する見解」(1956年)が参照されて、次のように記される。

この論文の重要性は、「シニフィアン」に関するラカンの考えが十全に展開されている論文(「無意識における文字の審級」[……](1957年))に1年先行しているということから計り知ることができる。それ以来、「無意識の修辞」という概念は精神分析家や言語学者のあいだで普通に使われるものとなったが、決定的な一歩を踏み出して、無意識は一つの修辞をもっているのではなく一つの修辞であると表明する者は誰もいない⁽¹⁸⁾。

「フロイトの発見における言語機能に関する見解」にはいくつかの議論が確認されるが、そのうちアガンベンがここで参照しているのは、バンヴェニストが論文末尾でおこなっている指摘だけである。

ここで素描される類比の数々には驚かされる。無意識は本当の「修辞」を用いるのであって、それは「通常の語りにおいて修辞を用いて作り出される」文体同様に「文彩」をもっている。譬喩の旧い[旧修辞学の]目録を見れば、表現の二つの帯域[夢の語りと通常の語り]に[ともに]適した一覧が提供される場所である。いずれにも、タブーによって生み出される代入手順が見いだされる。その手順とはすなわち婉曲、暗示、反用、暗示黙過、緩叙のことである。内容がどのようなものであるかによって、多種多様な隠喩が出現することになる。というのも、無意識の象徴の数々が意味と困難さを同時に引き出す

(17) Agamben, *Stanze*, p. 173.

(18) Agamben, *Stanze*, p. 173, n. 1.

のは隠喩的変換からだからである。両者はまた、古い修辞学が換喩（容器に入っているものを容器で示す）や提喩（部分を全体で示す）と呼んでいるものをも用いる。象徴の連鎖の「統辞」が両者に共通の文体手順を喚起するとすれば、それは省略法である¹⁹⁾。

いわば、バンヴェニストは、2年後に発表する「思考のカテゴリーと言語のカテゴリー」（1958年）でアリストテレスのカテゴリーをギリシア語という一言語の文法上のカテゴリーに一対一対応させることになる有名な身振りと似たような身振りで——それは主体の地位を言語上の主語の地位によって置き換える「言語活動における主体性について」（1958年）その他における身振りにもある程度まで似ている——、精神分析で指摘される無意識の「加工」の数々を旧修辞学の挙げる譬喩の数々に一対一対応させているということである。

このフロイト批判論文もまた、アガンベンによってこれ以降、参照されることはない。

3. セミオティック／セマンティック（『スタンツェ』）

『スタンツェ』におけるバンヴェニストへの言及の残りは、すべて一般言語学に関するもの、それもセミオティック／セマンティック論に関するものである。

アガンベンの基本的な認識をあらかじめ示せば、「ソシユールは言語／^{ラング}言葉の分断を指摘しえたが、当の分断を徹底的に究明することはできなかつた。バンヴェニストはこの分断をセミオティック／セマンティックとして更新するが、やはりこの分断を果てまで思考することはできなかつた」といったところである²⁰⁾。すでに引いたブーシュロンとの対談「考古学者

(19) Benveniste, “Remarques sur la fonction du langage dans la découverte freudienne” (1956), in *Problèmes de linguistique générale* (Paris: Gallimard, 1966), pp. 86-87.

と歴史家」にも次のようにある。

そのとき [アガンベンがバンヴェニストを読みはじめたとき] とくに私に衝撃を与えたのは、バンヴェニストがソシュールの記号学の不充分さをしだいに意識した瞬間です。そのとき彼は、ソシュールによる「言語」と「言葉」の対立をセミオティックとセマンティックのあいだの縫合しえぬ断裂として急進化する。見たとおり、人間の言語活動は二面に分割されています。この二面は互いに分離不可能であると同時に交流不可能であって、この分断にバンヴェニストは晩年、けりをつけようとしたのですが、そこまで辿り着くことができなかった⁽²¹⁾。

この見解は2017年のものだが、以下に見るとおり、同様の視点は『スタンツェ』ではじめて提示されている。

まずはソシュールを襲った危機が語られる。要するに、天才言語学者だった彼が沈黙したのは「西洋形而上学の伝統の内部で言語活動の学をなすことの不可能性の典型的経験を根底から生きた⁽²²⁾」からだとされる。そして、「この危機の [証拠となる] 資料は以前、バンヴェニストによって発表され、記念すべき論文においてあらためて取りあげられたが、バンヴェニスト自身はそこから帰結のすべてを引き出しはしなかった [……]⁽²³⁾」

(20) 以下にも、「言語から言葉への移行の問題を攻囲する」云々とある（すでに引用したとおり）。Agamben, “Postilla 1983,” p. 145.

(21) Agamben & Boucheron, “L’archéologue et l’historien: Dialogue avec Giorgio Agamben,” p. 170.

(22) Agamben, *Stanze*, p. 182.

(23) Agamben, *Stanze*, p. 182. なお、「バンヴェニストによって発表され」とあるのは、ロベール・ゴデルによって発表された以下のテキスト群を指す。Robert Godel, ed., “Notes inédites de F. de Saussure,” *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 12 (Genève: Droz, 1954), pp. 49–71. (アガンベンは以下と取り違えたのかもしれない。Benveniste, ed., “Lettres de Ferdinand de Saussure à Antoine Meillet,” *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 21 (Genève: Droz, 1964), pp. 93–130.) また、「記念すべき論文においてあらためて取りあげられたが」とい

と言明される。ソシュールの沈黙については、註で、さらにバンヴェニストの言明が引かれている。「この沈黙が隠しているドラマは苦痛に充ちたものだったにちがいない。それは年を追うごとに深刻化し、一度として出口を見いだすこともなかった²⁴⁾」。

ところが、数年後にヴァールブルク論への「1983年の傍註」で「[……] アカデミズムが記号論のもろもろの立場へと（バンヴェニスト、さらにはソシュールによって指示された視点のはるかに手前で）重ね合わされ²⁵⁾」たと述べられるとおり、この深刻さは真面目に受け取られることなく、あいもかわらず、いわば呑気に記号論が展開されてしまっているという。

記号論のアルゴリズムにおいてシニフィアンとシニフィエを分離する障壁があるのは、記号は現前の十全さにおいては生産されえない、という不可能性を示すためである。ソシュールによる記号観念のもともとの措定は、「永遠に否定的な諸差異の襞」としての言語的事実、という、問題をはらんだものだったが、記号観念をこの措定から切り離し、signans [意味するもの] と signatum [意味されるもの] のポジティブな単位としてしまうことは、記号の学を形而上学へとふたたび陥らせてしまうことに等しい²⁶⁾。

この「記号論」の趨勢に逆らうのがバンヴェニストである。上記の言明に

うところには註が立てられ、以下が参照されている。Benveniste, “Saussure après un demi-siècle,” *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 20 (Genève: Droz, 1963), pp. 7-21. これは以下に収録された。Benveniste, “Saussure après un demi-siècle,” in *Problèmes de linguistique générale*, pp. 32-45. これ以降、本稿で引用・参照するばあいは後者からおこなう。

24) Agamben, *Stanze*, p. 183, n. 1. バンヴェニストの言明は以下に読めるもの。

Benveniste, “Saussure après un demi-siècle,” p. 37.

25) Agamben, “Postilla 1983,” p. 145.

26) Agamben, *Stanze*, p. 186.

付された註は比較的長い文章であり、アガンベンによる、バンヴェニストの一般言語学関連の功績のまとまった評価としては最初のものになっている。

言語現象をまるごと説明しようとする狭義の記号論的視点は不適となる、ということについての最も明晰な意識は、E・バンヴェニスト（つまり、私たちによれば、言語の学の新たな「状況」を操作した一言語学者）に負っている。言語活動の二重の意味生成（これを彼はセミオティックなモードとセマンティックなモードと定義づけている。前者は「それとして認識され」る必要があり、後者は「理解され」る必要がある。両者のあいだに推移はない）を彼が区別していること、また、記号論的な意味（シニフィアンとシニフィエのポジティヴな単位としての）という観念がもはや有効ではないところで彼が意味の問題の「別の局面」を探求していることは、私たちが『スタンツェ』で意味することのオイディプスの観念をスフィンクスの観念に対立させることで形作ろうとしたのと同じ地帯に向けて合図を送っている²⁷⁾。

セミオティック／セマンティックは、主としてバンヴェニストの「言語の記号学」（1969年）（後に『諸問題』第2巻に収録される）で開陳される概念対である。要するに、セミオティックは記号の水準、セマンティックは文・言説（ソシュールが「言葉」概念に担わせていわば棚上げにしてしまったとされる、実際に言表行為としてなされる言語運用）の水準である。つまり、「記号 [つまりセミオティックの単位] から文 [セマンティックの単位] へは、統語化によるにせよ他のしかたにせよ、推移はない。一つの割れ目が両者を互いに分離している²⁸⁾」。

²⁷⁾ Agamben, *Stanze*, p. 186, n. 1.

²⁸⁾ Benveniste, “Sémiologie de la langue” (1969), in *Problèmes de la linguistique*

オイディプスの／スフィンクスのというのはアガンベン自身が『スタンツェ』で案出した概念対である。前者は、謎の解明（これこれのシニフィアンに対応する安定したシニフィエを見いだすこと）によって記号の単位を回復・確定できるとする安易な思い上がりを指し——つまりはこれが同時代の記号論の興隆に対応する——、後者はそのような安定的単位の確定の不可能性（これこれのシニフィアンに対応するシニフィエはあらかじめ存在するわけではないということ）にとどまり、そのことにこだわる——シニフィアンとシニフィエのあいだの消去不可能な障壁を強調する——性向を指す²⁹⁾。というわけで、バンヴェニストの立場はスフィンクスの側ということになる³⁰⁾。

4. セミオティック／セマンティック，その後の反復（「中期」）

バンヴェニストがセミオティック／セマンティックという概念対を提示したこと（より正確には、セミオティックからセマンティックへの推移不可能性を指摘したこと）に対するこのアガンベンの評価は、その後も変わらぬまま、繰り返し説明される。

générale, 2 (Paris: Gallimard, 1974), p. 65. 後述するとおり、この引用は頻繁に繰り返される。たとえば、以下にも同一の引用が見られる。Agamben & Boucheron, “L’archéologue et l’historien,” p. 170.

29) 以下を参照。Agamben, *Stanze*, pp. 163-164. なお、以下にも類似の視点が確認できる（オイディプスは言及されないが、スフィンクスは同じおもむきを帯びて登場する）。Agamben, *Idea della prosa* (Milano: Feltrinelli, 1985 [Macerata: Quodlibet, 2002 [2013]]), pp. 97-98.

30) より正確に言えば、シニフィアン／シニフィエの結びつきを、バンヴェニストは「必然的」である（恣意的なのはシニフィアンと参照対象の関係である）と捉えているが、このことをアガンベンは他の箇所でも了解している。ここで重要なのは、シニフィアンからシニフィエへ、言語から言葉（ないし言説）へといった移行が当然視される（不問に付される）ことへの抵抗であり、バンヴェニストが「スフィンクスの」な側に置かれるのは、これと似た抵抗がバンヴェニストのセミオティック／セマンティックという問題設定にも確認されるからである。

『スタンツェ』の1年後に刊行された『インファンティアと歴史』には比較的充実した言及が見られる。同名の論文の直後に「註解」として提示されている5つの短いテキストのうち最初に置かれた部分は、数ページを割いてセミオティック／セマンティックの問題設定を紹介し、自らの開陳するインファンティア論と通底するものとしている。「人間の歴史的-超越論的な原初的次元としてのインファンティアの理論は、^{ランガージュ}言語活動の学の諸カテゴリー、とくにバンヴェニストによって定式化されたセミオティックとセマンティックの区別と関係づけると、その固有の意味を獲得する。インファンティア論は、その区別との一貫性をもつ展開を構成している⁽³¹⁾」。

ソシュールが^{ラング}言語から^{ディスクール}言説への移行の困難さについて記した、いわゆる^{ディスクール}「言説についての覚え書き」を比較的長く引用した後⁽³²⁾、アガンベンは「バンヴェニストが一連の模範的研究（「言語分析のレヴェル」（1964年）、^{ランガージュ}「言語活動における形式と意味」（1967年）、^{ラング}「言語の記号学」（1969年））で対決しているこの問題こそが、彼をして^{ランガージュ}言語活動のうちに^{シニフィアンス}二重の意味生成を、すなわち互いに截然と対立する二つの意味作用のモードを区別させる。その一方はセミオティックなモードであり、他方はセマンティックなモードである⁽³³⁾」と述べる。そして、引用元を明示せずに、「^{ラング}言語の記号学」から、両者を定義している箇所をまるごと引く⁽³⁴⁾。

それにすぐに続けて、やはり引用元を明示せずに、「^{ランガージュ}言語活動における形式と意味」から以下のような引用をおこなう。

(31) Agamben, *Infanzia e storia* (Torino: Einaudi, 1978 [2001]), p. 52.

(32) テキストも引用元も明示されていないが、2年後に同一テキストが引用される機会と同様、ジャン・スタロバンスキー『単語の下の単語』（1971年）から孫引きされたものとおぼしい、いわゆる^{ディスクール}「言説についての覚え書き」である。註40も参照。

(33) Agamben, *Infanzia e storia*, pp. 52-53.

(34) 以下を参照。Agamben, *Infanzia e storia*, p. 53. 引用は以下に相当。Benveniste, “Sémiologie de la langue,” pp. 64-65.

セミオティックは言語^{ラング}の特性として特徴づけられ、セマンティックは言語^{ラング}を現働化させる発話者の活動の結果として生ずる。セミオティックな記号は即自的に存在し、言語^{ラング}の現実を基礎づけるが、個々の適用は含まない。セマンティックの表現である文は、個々のもの以外ではない。[……] 私たちが引き出そうと努めている理論的分節化に光を当ててくれると思える、次の顕著な事実について仔細に考えてみよう。一言語^{ラング}のセマンティックを他言語^{ラング}のセマンティックへと移し替えてやることはできる。「salva veritate [真理を損ねずに]」である。これが翻訳の可能性である。だが、一言語^{ラング}のセミオティック系を他言語^{ラング}のセミオティック系へと移し替えてやることはできない。これが翻訳の不可能性である。ここで人は、セミオティックとセマンティックの違いに触れている³⁵。

重要なのはやはり、そのつど、セミオティックとセマンティックの推移不可能性である。アガンベンは「じつのところ、二つの秩序（セミオティックとセマンティック）は互いに分離され、交流することがなく、理論上は一方から他方への移行を認めることを可能にするものは何もない、とバンヴェニストは認めている³⁶」と重ねて強調した後、「[……] 記号の世界は閉じている。記号から文へは、統語化によるにせよ他のしかたにせよ、推移はない。一つの割れ目が両者を互いに分離している³⁷」というバンヴェニストの言明を引いている。

そして、自らの提唱するインファンティア論こそがこの「割れ目」についての思考なのだとする見解があらためて開陳される。

³⁵ Agamben, *Infanzia e storia*, pp. 53-54. 引用は以下に相当。Benveniste, “La forme et le sens dans le langage,” in *Problèmes de linguistique générale*, 2, pp. 225, 228.

³⁶ Agamben, *Infanzia e storia*, p. 54.

³⁷ Agamben, *Infanzia e storia*, p. 54. 引用は以下に相当。Benveniste, “Sémiologie de la langue,” p. 65.

じつのところ、私たちがこの「インファンティアという」用語で指している歴史的-超越的次元は、まさにセミオティックとセマンティックのあいだ、^{ラング ディスクール}言語と言説のあいだの「割れ目」に位置しており、いわばその理由を提供する。人間がインファンティアをもっている（つまり、人間は話すために、インファンティアを自分から手放し、^{ランガーージュ}言語活動の主体として自らを構成する必要がある）という事実こそが、記号の「閉じた世界」を破碎し、^{ラング}純粋な言語を人間の言説へと、^{ディスクール}セミオティックをセマンティックへと変容させる。人間は、インファンティアをもっているかぎりには、つねにすでに話す者であるのではないかぎりには、^{ラング}言語を急進的に変容させずには、^{ラング ディスクール}言語を言説として構成せずには、^{ラング}記号システムとしての言語のなかに入ることにはできない。

パンヴェニストの語る「二重の意味生成」^{シニフィアンス}をどのような意味で理解しなければならないかは、このようにして明らかになる。セミオティックとセマンティックは、実体をもった二つの現実なのではなくて、むしろ、人間のインファンティアを定義づける二つの超越論的限界であり、またそれと同時に、両者は人間のインファンティアによって定義づけられる。セミオティックとは、バベル以前の、自然の純粋な^{ラング}言語に他ならない。人間は話すためにこれを分かちあうが、インファンティアのバベルにあって、つねにここから外に出ようとしている。セマンティックのほうは、^{ディスクール}言説の審級でセミオティックから瞬間的に突出するということにおいてしか存在せず、当の言説の諸要素は——口にされるや否や——^{ラング}純粋な言語へとふたたび落下し、その諸要素を、^{ラング}純粋な言語は黙した記号辞書のなかにもふたたび迎え入れる。人間の^{ランガーージュ}言語活動は、自然のセミオティックな海から一瞬だけ、イルカのように頭を外に出す。だが、人間的なものとは、^{ラング ディスクール}純粋な言語から言説へのこの移行に他ならない。この移り行き、この瞬間が歴史である³⁸。

³⁸ Agamben, *Infanzia e storia*, pp. 54-55.

なお、これ以降、この「註解」では数回にわたってセミオティック／セマンティックへの言及がなされるが、そのいずれも、以上で提示された問題設定を前提にしている⁽³⁹⁾。

次にセミオティック／セマンティックが登場するのは、2年後に発表された論文「^{パロール}言葉と知」（1980年）である。その第2節で一般言語学の議論が導入されている。バンヴェニストが登場するのは、^{ディスカール}ソシユールのいわゆる「言説についての覚え書き」が引用された後である⁽⁴⁰⁾。

バンヴェニストが模範的な研究において、人間の言語活動の「^{ランガージュ}二重の^{シニフィアン}意味生成」の問題として明確化して取りあげたのがこの問題である。人間の言語活動は、互いに截然と対立する二つの意味作用のモードを呈する。セミオティックなモード（言語の面に属するもの）とセマンティックなモード（^{パロール}言葉の面に属するもの）であるが、両者間には移行はない（「一つの割れ目が両者を互いに分離している」とバンヴェニストは書いている⁽⁴¹⁾）。

(39) Agamben, *Infanzia e storia*, p. 57. 「[[……]] 純粋な意味作用の契機としての言語 [……], バンヴェニストがセマンティックなモードに対立させてセミオティックなモードとして区別した当のものと等価なもの [……]」。p. 62. 「[[……]] 互いに連続的でもあり不連続的でもある二つの次元のあいだの、限界にあるこの状況こそが、人間の言語活動が純粋にセミオティックな圏域を超越して（バンヴェニストの表現によれば）「二重の意味生成」を獲得するようにする」。p. 64. 「このようにして、神話がセミオティックとセマンティックの対立——バンヴェニストはまさにこれを翻訳の可能性と不可能性の対立として特徴づけているのだが——に対して媒介的圏域を占めるようになるということ [……]」。この最後の引用で暗示されている、翻訳の可能性／不可能性に関するバンヴェニストの議論は、すでに見たとおり「言語活動における形式と意味」に見られる。

(40) 「覚え書き」を以下から引いている旨が註記されている。『インファンティアと歴史』においても同様の孫引きだったのだろう。Jean Starobinski, *Les mots sous les mots* (Paris: Gallimard, 1971), p. 14.

(41) Agamben, “La parola e il sapere,” *Aut-aut*, no. 179/180 (Firenze: La Nuova Italia, September/December 1980), p. 158. 以下、同一の文脈を参照している別

なお、いわゆる「中期」をゆるく締めくくることになる『散文のアイデア』（1985年）には、バンヴェニストへの明示的言及は見られない。だが、「名のアイデア」と題された短いテキストに、セミオティック／セマンティックやその翻訳可能性／不可能性に関するバンヴェニストの指摘を、暗黙のうちに——とはいえ、疑念の余地なく——参照する議論が見られる。名／言説とはセミオティック／セマンティックに他ならず、「細い尾根」とは「割れ目」に他ならない。

言えないものについて熟考する者にとって、以下は示唆的な指摘である。すなわち、何かについて語るができないとしても、言語はその何かを完璧に名づけることができる。古代の哲学が、名（*onoma*）の平面を言説（*logos*）の平面から注意深く区別していたのはそのためである。古代の哲学はこの区別の発見を非常に重要なものと見なしていた。発見の功績をプラトンに帰したほどである。じつは、その発見はそれよりも早かった。単一にして第一の実体についてはロゴスはなく名のみがある、と最初に断言したのはアンティステネスである。この構想によれば、言えないものとは、言語においてどのようにしても証示されぬものではなくて、言語においてただ名づけられるだけのものである。それに対して、言いうるものとは、適切な名が欠けているばあいがあるとさえ、これこれの定義的言説において語ることのできるものである。つまり、言いうるものと言えないもののあいだの区別は言語の内部を通過しており、細い尾根があちら側とこちら側に二つの斜面を下ろすようにして言語を二分している⁽⁴²⁾。

の箇所もある（pp. 163-164）。

(42) Agamben, *Idea della prosa*, p. 91. ちなみに、『散文のアイデア』刊行後になされたインタビューで、文献学者になるのにどのような研鑽を積んだかと聞かれ、「アカデミックな意味では何も。ラテン語とギリシア語については最高の高校があって、後になって独学でやりなおしました。さらに有機的には、バンヴェニストやメイエといった一般言語学の研究を追いました」と回答している。以

5. セミオティック／セマンティック，その後の反復（「後期」）

アガンベンがいわゆる「後期」に移行しても，セミオティック／セマンティック論の肯定的評価に変更はない。まずは移行期のいくつかのテキストから見ていく。

『インファンティアと歴史』フランス語版に付された「^{エクスペリメントゥム・リングアエ}言語の経験」(1989年)というテキストには次のようにある。

『インファンティアと歴史』において，このような^{ランガージュ}「言語活動の」超越論的経験の場は，^{ラング}言語と^{パロール}言葉の違い（というよりむしろ，バンヴェニストの用語においては，セミオティックとセマンティックの違い）のうちにある。これは，^{ランガージュ}言語活動に関するあらゆる省察が対決しなければならぬ，避けて通ることのできないものである。バンヴェニストは，^{ランガージュ}両次元のあいだに移行がないことを示し，^{ランガージュ}言語活動の学を（そしてまたそれとともに，言語学が先端学となっている，人文科学の全陣容を）その窮極のアポリアの前に連れて行った。哲学へと変容することなくしては，そのアポリアを超えて前に進むことはできない⁽⁴³⁾。

実質的にこれと同じころに書かれたとおぼしい（実質的な執筆年は「1980年代後半」という以上には示されていないが，内容からして^{エクスペリメントゥム・リングアエ}「言語の経験」と同じころと推測される⁽⁴⁴⁾）「^{エクスペリメントゥム・ヴォキス}声の経験」でもセ

下を参照。Adriano Sofri, “Un’idea di Giorgio Agamben” (interview), *Reporter* (Roma, November 9–10, 1985), p. 33.

(43) Agamben, “Experimentum linguæ” (1989), in *Infanzia e storia*, p. xi.

(44) 発表年は2016年だが，草稿執筆はその30年近く前とおぼしい。Agamben, “Experimentum vocis,” in *Che cos’è la filosofia?* (Macerata: Quodlibet, 2016), p. 7. 「[……] ^{エクスペリメントゥム・ヴォキス}「声の経験」は1980年代後半の覚え書きを新たな方向づけにおいて取りあげなおし，展開したものである。したがって，その覚え書きは「もの自体」，「記憶のおよばないイメージ」，「*se 絶対と生起」（後に『思考の潜勢力』（ヴィチエンツァ，2005年）に収録される）が生まれ，また『イン

ミオティック／セマンティックは数回言及されるが⁽⁴⁵⁾、バンヴェニストがセミオティック／セマンティックの推移不可能性を乗り越えられなかったという側面が「難破」というかなり強い表現で強調されている2ヶ所が目につく。「これは、バンヴェニストの極端な思考が乗り上げて難破した、セミオティックとセマンティックのあいだの乗り越えられない対立である（「記号の世界は閉じている。記号から文へは〔……〕推移はない。一つの割れ目が両者を互いに分離している）〔……〕⁽⁴⁶⁾。「〔……〕バンヴェニストの著作において突如、力尽きて難破すること〔……〕⁽⁴⁷⁾」。もちろん、バンヴェニストの能力が不十分だから難破した、ということではなく、並外れた言語学者バンヴェニストだからこそセミオティック／セマンティックの推移不可能性という行き止まりを明瞭に提起しえた、というほどの含意だろう。

そのおそらく少し後に書かれたジャン・クロード・ミルネール論「哲学と言語学」（1991年）でも、「学に対する言語活動^{ランゲージ}の過剰点を捉えることができる言語学者⁽⁴⁸⁾」として、ソシュールやミルネールと並んでバンヴェニストの名が挙げられている。ここで「過剰点」と名指されている当のものはバンヴェニストのばあい、やはりセミオティック／セマンティックの推移不可能性とおぼしい。

このことは、その4年後の『ホモ・サケル』での言及を見れば確認され

ファンティアと歴史』の新版（トリノー、2001年）の序文としてあらためて発表された「言語^{エクス・ペリメンツトウム・リンゲアエ}の経験」が生まれたのと同じ文脈に属している」。ちなみに、「もの自体」は1984年、「記憶のおよばないイメージ」は1986年、「*se」は1982年、「言語^{エクス・ペリメンツトウム・リンゲアエ}の経験」は1989年に公にされている。『『インファンティアと歴史』の新版』というのは、フランス語版（1989年）をふまえて2001年にイタリア語であらためて出された版を指す。

(45) Agamben, “Experimentum vocis,” pp. 19, 28.

(46) Agamben, “Experimentum vocis,” p. 23. 引用はもちろん、「言語^{ランゲ}の記号学」からのもの。

(47) Agamben, “Experimentum vocis,” p. 26.

(48) Agamben, “Filosofia e linguistica: Jean-Claude Milner, *Introduction à une science du langage*” (1991), in *La potenza del pensiero*, p. 75.

る。まず、アラン・バディウの出来事論の整理的提示に「過剰点」という表現が登場する。

彼 [バディウ] は出来事を、これこれの状況への所属が状況の視点からは決定不可能であるような要素、と定義している。出来事が国家に対して必然的に突出物として現れるのはそのためである。さらに、バディウによれば、所属と包含の関係は根本的な不等関係によってしるしづけられている。すなわち、包含はつねに所属を超過する（過剰点の定理）⁽⁴⁹⁾。

これをアガンベンは、セミオティック／セマンティックにも見られる関係として提示している。

過剰点の定理に対応するのは、これこれの単語は現勢力にあって外示できる以上の意味をつねにもつという事実、意味と外示のあいだには埋められない隔たりがあるという事実である。この隔たりこそまさに、[……] セミオティックとセマンティックのあいだに還元不可能な対立があるとするバンヴェニストの理論において [……] 問題になっているものである⁽⁵⁰⁾。

その3年後の『アウシュヴィッツの残るもの』（1998年）にもやはり、（セミオティック／セマンティックという用語対すら登場しないものの）ソシュールのいわゆる「^{ディスコース}言説についての覚え書き」への言及から、バンヴェニストの「記号の世界は閉じている。記号から文へは、統語化によるにせよ他のしかたにせよ、推移はない。一つの割れ目が両者を互いに分離し

(49) Agamben, *Homo sacer*, 1 (*Il potere sovrano e la nuda vita*) (Torino: Einaudi, 1995), p. 30.

(50) Agamben, *Homo sacer*, 1, p. 30.

ている」という文言の引用までのセットが見られる⁵¹⁾。ただし、それは言表行為論の導入の準備的議論として置かれたものではある。

次はまた数年の隔たりがあるが、エンツォ・メランドリの大著『線と円』(1968年)の復刊に際してアガンベンが付した序文「一考古学の考古学」(2004年)に、『線と円』の発表年と「^{ラング}言語の記号学」の発表年の近さに触れつつメランドリとバンヴェニストを対比させるなかで、やはりセミオティック／セマンティックが登場する。まず「^{ラング}言語の記号学」から、セミオティック／セマンティックを定義している箇所が例によって比較的長く引かれ、その引用はやはり「一つの割れ目が両者を互いに分離している」で終わっている⁵²⁾。次いでバンヴェニストに関する別の議論になるが、さらにその後、ソシュール批判(というより、シニフィアン／シニフィエやラング／パロールといったものをポジティブな単位としてしまうことの批判)がバンヴェニストによって「言語記号の本性」(1939年)からすでになされている旨が指摘されている(ちなみに、アガンベンの著作のなかでは、このことはここではじめて指摘されている)。「すでにバンヴェニストは、1939年の有名な論文において、恣意性について語るができるのはシニフィアンと参照対象の関係に関してであって、シニフィアンとシニフィエの関係に関してではなく、シニフィアンとシニフィエの関係のほうはつねに必然的でしかない、と示して、ソシュールのテーゼを批判していた⁵³⁾」。

アガンベンは『事物の印徴』(2008年)でも、「^{ラング}言語の記号学」から比較的長い引用をしてセミオティック／セマンティックの分離について説明している(『インファンティアと歴史』と同様)。これに、ソシュールのいわ

51) Agamben, *Quel che resta di Auschwitz: L'archivio e il testimone (Homo sacer, 3)* (Torino: Bollati Boringhieri, 1998), p. 107.

52) 以下を参照。Agamben, “Archeologia di un'archeologia,” in Enzo Melandri, *La linea e il circolo: Studio logico-filosofico sull'analogia* (Macerata: Quodlibet, 2004), pp. xxv-xxvi.

53) Agamben, “Archeologia di un'archeologia,” p. xxvii.

ゆる「^{ディスクール}言説についての覚え書き」からの引用と、「記号の世界は閉じている」から始まり「一つの割れ目が両者を互いに分離している」で終わる例の引用が続いている⁵⁴。そして、この議論は言表行為論の評価へとつながられている。「これと同じ時期にバンヴェニストが展開している言表行為論は、この割れ目に橋を架ける試み、セミオティックからセマンティックへの以降を思考可能なものとする試みと見なすことができる⁵⁵」。

セミオティック／セマンティックの分離の重要性には、『身体の使用』(2014年)でも、明示的にはないが、バンヴェニストの名を挙げつつ言及されている(もしかすると、ここでなされているのも言表行為論の評価かもしれないが、とりあえずここに挙げておく)。

ニーチェやベンヤミンやフーコーといった非職業的哲学者が超越論的なものからの脱出の道を探求し、そしてエミール・バンヴェニストのような言語学者が、脱出の道をそれとは異なる方向で探求した。彼らは歴史的ア・プリオリを認識から^{ランガージュ}言語活動へと後ろにずらした。そうするにあたって彼らは、意味ある命題の平面には執着せず、そのつど、^{ランガージュ}言語活動という純然たる事実、言表が与えられるという純然たる事実を、その意味上の内容以前ないし内容を超えた先で問いに付す次元を分離して取り出した⁵⁶。

「言いうるものとアイデアについて」(2016年)(同年刊行の『哲学とは何か』に収録されている)にもセミオティック／セマンティックは顔を出す。^{ラング}「言語の記号学」から、セミオティック／セマンティックを定義している箇所が例によって比較的長く引かれている他⁵⁷、「バンヴェニストの最後

⁵⁴ Agamben, *Signatura rerum: Sul metodo* (Torino: Bollati Boringhieri, 2008), pp. 61-62.

⁵⁵ Agamben, *Signatura rerum*, p. 63.

⁵⁶ Agamben, *L'uso dei corpi (Homo sacer, 4-2)* (Vicenza: Neri Pozza, 2014), pp. 153-154.

の探求 [は], 言語がセミオティックとセマンティックという互いに分離された, 交流しあわない二つの面に分割されており, 両者のあいだには移行はないとする診断——言語活動の学にとってこれはあるしかたで一つの難破となっている——によって締めくくられた [……]⁵⁸] 云々とも繰り返されている (これに, 「記号の世界は閉じている」から始まり「一つの割れ目が両者を互いに分離している」で終わる例の引用が続く)。また, 翻訳可能性／不可能性に関する例の議論も (バンヴェニストの表現をほとんどそのまま借りながら) あらためて参照されている。「バンヴェニストは翻訳に, セミオティックとセマンティックの違いに人が触れる点を見て取った。じつのところ, 一言語^{ラング}のセマンティック系を他言語^{ラング}のセマンティック系へと移し替えてやることはできる (これが翻訳の可能性である)。だが, 一言語^{ラング}のセミオティック系を他言語^{ラング}のセミオティック系へと移し替えてやることはできない (これが翻訳の不可能性である)。つまり翻訳は, 一つの可能性と一つの不可能性の交差する点で, 言語活動の二つの面が一つに結びつき分割される境界線に位置している⁵⁹」。

なお, アガンベンは, バンヴェニスト『語彙集』の英語版 (2016年) に「語彙と声」という序文を寄せている。そこにも当然のようにセミオティック／セマンティックは登場するが⁶⁰, この概念対は別のテーマと関連づけられている。

(この先は別稿を要する。)

57) 以下を参照。Agamben, “Sul dicibile e l’idea,” in *Che cos’è la filosofia ?*, p. 90.

58) Agamben, “Sul dicibile e l’idea,” p. 88.

59) Agamben, “Sul dicibile e l’idea,” p. 98.

60) Agamben, “The Vocabulary and the Voice,” trans. Thomas Zimmer, in Benveniste, *Dictionary of Indo-European Concepts and Society*, trans. Elizabeth Palmer (Chicago: Hau Books, 2016), xiii–xiv.